

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	鴨長明『発心集』における善知識観（上）：“憂きことにあふも善知識”
Author(s)	宗近, 恵子
Citation	論叢 国語教育学, 16 : 36 - 53
Issue Date	2020-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/50699
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050699
Right	
Relation	



鴨長明『発心集』における善知識観（上）——“憂きことにあふも善知識”——

宗近 恵子

はじめに

「善知識」の語義について、中村元監修『広説仏教語大辞典』は次のように解説している¹⁾。

- ① 知識は知己、知り合いの意。よき友。親友。良友。自分のことをよく知ってくれている人。友達。心の友。善友・勝友ともいう。
- ② 高い徳行を具えた人物。
- ③ ブツダの教えを継承し、伝播する人びと。
- ④ 教えを説いて、仏道に入らしめる人。仏道への手引きをする有徳者。立派な指導者。教え導く人。正しい道に導く人。人に生まれきたことの真の意味を教えてくれる人。賢者。
- ⑤ 禅宗では、さとりに導いてくれる善い指導者、正しく導く人である師家をいう。単に「知識」ともいう。
- ⑥ 浄土真宗では、信徒が法主をよぶ称。また往生に必要な五つの条件の一つとしては仏法に会う縁である善知識。

一方、浦田成美氏は説話文学作品における「善知識」の用例分析を通して、以下の九種にその用法を分類している²⁾。

- ① 僧、高僧。（臨終時に仏道へ導く役割を担っている場合が多い

- ① 僧、高僧。（臨終時に仏道へ導く役割を担っている場合が多い）
- ② 善友、共に仏道に励む仲間、信者仲間。
- ③ 仏道への導き手。（特定のものを指していない）
- ④ うき事。
- ⑤ 寄進、勸進。

- ⑥ 經典の文を踏まえたものや引用。（『法華経』『華嚴経』『往生要集』『極楽浄土九品往生義』『観無量寿経』『般舟讚』『首楞嚴経』など）

- ⑦ 肉親。（親子、兄弟、夫婦が相手のために念仏をすすめたり、仏の教えを説く）
- ⑧ 法華経、経。（誦読、書写供養が仏縁につながる）
- ⑨ その他。（仏道修行、隠棲の場所が静かであること、曼荼羅、鏡）

鴨長明『発心集』には「善知識」の語、これに関わる語彙が流布本（慶長四年板本）の八巻までの各巻に見られ、話数は異本（神宮文庫本）独自の二話を含めて十三話に及ぶ。各話の所在、題名、及びそれぞれ「善知識」の語義用法、該当箇所引用を以下に示す³⁾。（なお、語義用法末尾に付した丸数字は浦田氏の「善知識」分類番号である）。

●流布本

1 卷一第11話「高野の辺の上人、偽つて妻女を儲くる事」

〔善友、共に仏道に励む仲間としての善知識〕【②】

・上人「もし又、互ひに善知識とも思ひて、後世までの勤めをもしづかにせむとならば、こひねがふところなり。」

・妻「いみじき善知識と、人知れず喜びてこそ過ぎ侍りし」

2 卷二第1話「安居院聖、京中に行く時、隠居の僧に値ふ事」

〔仏道への導き手としての善知識〕【③】

・隠居僧「かくて形の如く後世のつとめを仕りて侍りつれど、知れる人も無ければ、善知識も無し。」

3 卷二第6話「津の国妙法寺楽西聖人の事」

〔仏道への導き手としての善知識〕【③】

・楽西「此の入道殿（清盛）は、功德を作し給はむには、何れの事か、心に叶はざらむ。善知識を尋ね給はんにも、又、行徳高き人多し。誰か参らざらむ。」

4 卷二第8話「真浄房、暫く天狗になる事」

〔肉親の後世を弔う善知識〕【⑦】

・真浄房「本意の如くおくれ奉るならば、母の御ため善知識となりて、後世をとぶらひ奉らむ。」

5 卷三第3話「伊予入道、往生の事」

〔仏道への導き手としての善知識〕【③】

・その息（源義家）は、つひに善知識なく、懺悔の心もおこさざりければ、罪ほろぶべき方なし。

6 卷四第7話「或る女房、臨終に魔の変ずるを見る事」

〔臨終に立ち会う善知識〕【①】

・病ひをうけて限りなりける時、善知識に、ある聖を呼びたりけれ

ば、念仏すすむる程に、

・聖「五逆の人だに、善知識にあひて、念仏十度申しつれば、極楽に生る。」

7 卷四第8話「或る人、臨終に言はざる遺恨の事、臨終を隠す事」

〔臨終に立ち会う善知識〕【①】

・（評論部）物の心あらん人は、つねに終りを心にかけてつ、苦しみも少なくて、善知識にあはん事を仏菩薩に祈り奉るべし。

・（評論部）終り正念ならねば、又一期の行ひもよしなく、善知識のすすめも叶はず。

・（評論部）たとひもし、臨終正念なれども、善知識の教ふるなければ、又かひなし。

・（評論部）しかるを、念仏功つもり、運心年ふかき人は、加被の故に終り正念にして、必ず善知識にあふ。

8 卷五第2話「伊家並びに妾、頓死往生の事」

〔仏道への導き手としての善知識—愛執〕【④】

・（評論部）此の度、（愛執ヲ）思ひ切りて、極楽に生れなば、うきもつらきも寝ぬる夜の夢にことならじ。立帰り善知識とさとりて、かれを導かん事こそあらまほしく侍れ。

※関連話題…流布本巻五第1話「唐房法橋、発心の事」

…異本巻四第14話「唐坊法橋、発心の事」

・（異本話末評）浮世ヲ本トシテ、カ、ル道心ヲ発セル人也。

9 卷六第13話「上東門院の女房深山に住む事、穢土を厭ひ浄土を欣ぶ事」

〔臨終に立ち会う善知識—『観無量寿経』引用〕【⑥】

・（評論部）下品下生の人を説くには、四重五逆を作る悪人なれども、命終の時、善知識の進めにあひて、十度「南無阿弥陀仏」と

申せば、猛火忽ちに滅して蓮台にのぼる、と説けり。

10 卷第七第5話「太子の御墓覚能上人、管弦を好む事」

(臨終に立ち会う善知識)【①】

・重き病ひをうけて限りなりける時、**善知識**来たりて念仏をすすむるに、

・臨終の**善知識**は、よくよく心を知るべき事なり。

・吉田斎宮と申す人おはしけり。御悩重くして、限りになり給ひける時、大原の葉忍上人、**善知識**にまゐりて、念仏すすめ奉りける時に、

・或る人、病ひかぎりなりける時、**善知識**添ひ、さて念仏をすすめけれど、

11 卷第七第12話「心戒上人、跡を留めざる事」

(仏道への導き手としての善知識―「身」)【④】

・(評論部) 此の身は、かくあだなる物なれど、しかも、我が心かしく愚かなるに従ひて、仇敵ともなり、又、**善知識**ともなるべし。

・かかれば、ひたすら身のうらめしかるべきにもあらず。善悪にも従ひて、大きな**知識**となるべきなり。

※関連話題・卷第七第13話「齋所権介成清の子、高野に住む事」

・成清子「世は末世なり。身は凡夫なり。今たまたま心をおこせり。

此の心さめざらん先に往生を遂げんと思ふ。此の故に身命を惜しまず。」

●異本

12 卷三第7話「桓舜僧都、貧に依り往生したる事」

(仏道への導き手としての善知識―「貧」)【④】

・(話末評) 又、貧シキモ**善知識**也。

※関連話題・流布本卷八第12話「前兵衛尉、遁世往生の事」(善知識)なし)

・(評論部) 誠に、浮雲のとてもかくてもありぬべし。これも、かの桓舜僧都のたぐひこそ。世の思ふやうならぬより、**得脱すべき縁**のありけるにこそ。

13 卷第五第11話「永観律師事」

(臨終に立ち会う善知識)【①】

・此人、終りニ臨テ、サスガニ、**善知識**無クテハ悪キトテ、聖人一人喚タリケルニ、

・(話末評) 彼ノ聖人、誰ニカハ。**善知識**モ、々々々ニヨルベシ。無案内ナルカイシヤク、無用大事ノ事也。

※同話・流布本卷二第2話「禅林寺永観律師の事」(臨終時話題なし)

この十三の話題の中で長明の善知識観として注目されるのは『広説仏教語大辞典』の語義解説にはないもの、すなわち人間以外の用法、なかでも浦田氏分類番号④「うき事」に該当するもので、「愛執」(8)、「身」(11)、「貧」(12)を「善知識」とする事例である。これらは『宝物集』にいう「憂きことにあふも善知識」の善知識観(後述)に関わる。また、十三話題のうち、10は「管弦」「風月」の数寄をもつて往生を果した話題である。

以下、長明の善知識観をめぐって、『発心集』中の「憂きこと」及び長明の執としてあった「数寄」を善知識とする事例を中心に検討し、その位相を他の用法事例の概観を通じて考察する。

一 憂きことにあふも善知識

1 『憂きことにあふも善知識』 観の拡がり

『宝物集』に「憂きことにあふも善知識」とのとらえ方がある点については、すでに今井ちとせ氏の指摘がある。⁴ 『宝物集』（七巻本）の十二門中第十の善知識門で（巻第七）、善知識が往生や得脱において頼りとなるべきこと、極重悪人も善知識によつて救われることを説き、その末段には次のような記述がある。

諸経の中に、「あるひはまづしく、あるひは世をうらみ、或はうき事にあふ、みな善知識の因縁なり」とぞ申ためる。

ここから、「貧」「恨」「憂」を「善知識の因縁」としていることがわかる。⁵ たとえ「憂きこと」に出会ったとしても、それを機縁として出家できれば、その憂きこととの出会いも「善知識」であるというのである。

また、浦田成美氏は、『延慶本平家物語』においてもこの『宝物集』の善知識観との関連がうかがえるという。⁶

「カトル身ニ罷成事、一旦ノ嘆ハ申ニ及ネドモ、一ニハ来生不退ノ悦アリ。」

「サレバ可然善縁善知識トコソ思侍レ」

建礼門院は中宮としての生活から一転、一門の都落ち、滅亡を経て今に至った境遇こそが善知識であるとす。そして、臨終正念にて往生を遂げた建礼門院について、地の文では「今生ノ御恨ハ一旦ノ事也。善知識ハ是莫大之因縁ト覺テ、目出ゾ聞ヘシ。」と評されてもいる。

浦田氏は、さらに同時代の他の説話文学作品の用例を博搜し、平安時代初期に比べ『古事談』以降の中世の説話集、特に『発心集』『撰集抄』『十訓抄』『古今著聞集』『沙石集』に「憂きこと」の意を含む「善知識」の用例が目立つとしている。本稿が見るのはこの内の『発心集』だが、ここではまず『十訓抄』の事例を取り上げて、『宝物集』の「憂きことにあふも善知識」観の拡がり、鴨長明自身の受容の在り様について確認しておく。

『十訓抄』にはこの善知識観に関わる記事が第九「懇望を停むべき事」中に二箇所に見出される。その一つは第四段の次の記事である。⁷

齊信民部卿の宰相の時、才幹すすめるによりて、兄の誠信の君を越えて、中納言になり給ひしに、誠信、わが身のうきを忘れて、さしあたりける恨みにたえず、くちをしと思ひ給へりけるにや、七日といふに、うらみ死に死に給へりける。手をにぎりて失せ給ひけるが、心や強かりけむ、指の爪、みな甲へ通りたりけりとぞ。弟に越さるること、帝王、臣下をけじめとして、そのためし少なからず。たちまちに、かくしもあるべきかはと、おそろし。三条内大臣公教公の御子、実綱中納言、弟の君達、実房、実国などに越えられて、

いかなればわがひとつらのかかるらむうらやましきは秋の雁がね

などよみ給ひけむも、恨みは深くこそ、おぼしめしけども、かかることはなかりき。誠信の目前に、悪趣の報を感じしめ給ひけむ、よしなくこそおぼゆれ。

願基中納言の、つねは「罪なくて、配所の月を見ばや」といはれけるには似給はず。よき善知識のついでを得ながら、身をむな

しくなしはてし、無益のことか。

この例については今井氏の先の論考に次の言及がある。

『十訓抄』にも「憂きことにあふも善知識」と同類と見なせる用例が二例あり、その一つは源顕基の「罪なくして配所の月を見ばや。」という言葉を引いている。顕基の言葉と「善知識」を結びつけるのは『宝物集』独特の解釈であり、この用例は直接『宝物集』に依ったものであらうと判断できる。

『宝物集』独特の解釈」とは、十二門第十善知識門の先の引用部分直後の、

入道中納言顕基卿の「罪なくして配所の月を見ばや」とねがひ給ひしは、流罪このもしきにはあらず、此世をおもひすつべき善知識にあはんとなり。

をいう。「顕基」は「罪なくして配所の月を見ばや」をもって教寄人の典型とされ、この秀句は多くの書に引用されている。それを、「此世をおもひすつべき善知識にあはん」との願いを表明したものとするのが『宝物集』である。この「独特の解釈」の『十訓抄』への継承は、『宝物集』の善知識観の浸透ぶりをよく伝える。なお、長明も流布本『発心集』巻五第8話「中納言顕基、出家・籠居の事」で顕基を取り上げている。ただし、そこでは出家後の子への顕基の恩愛に目が向けられ、有力者への親の口添えで「みなしこ」が引き立てられたことに、「みなし子」長明（『源家長日記』）は関心を寄せている（自らの関

心に引き寄せて話題を捉え語る長明に注意しておきたい。以下に見るように、それは善知識話題にも指摘できることである）。

『十訓抄』用例の今一つは第九第五段の評論部の次の記述である。

そもそも、人間の八苦の中には、怨憎会苦といへるは、もの恨めしきなり。国王、大臣も、これを離れ給はず。いはむや、その次下をや。

しかれば、心にもものかなはぬこと、世の習ひぞかしと思ひなして、さてはなくて、愚かなる人、ことわりをかへりみず、さしたる恨みの出で来ぬるをり、心のはやりのままに、こととはず、官をのがれて、入りこもり、家を捨てて、都を出づるたぐひ、これあり。その道心だにすすみ通るものならば、浮生の榮花ひらけても、いくほどかはあらむなれば、しかるべき善知識とも悦ぶべきに、身はさすがに捨てはてられぬものなれば、恨みは末も通らず、後悔しきりにもよほして、あるいは、いまさら世に出で、はしり仕へ、あるいは、高野、粉河のかくれよりも、いつしか帰来ぬるこそ、人笑はれに、いふにかひなけれ。

道心を最後まで持ち続けるならば、恨みを抱くことも「しかるべき善知識」となり、それを悦ぶべきだという。これも『宝物集』の「憂きことにあふも善知識」観に基づくものであらう。

ところで、『十訓抄』ではこの後、第九第六段で高麗に出兵した橘正通の話題が語られ、同第七段に鴨長明が取りあげられている¹⁰。両段はともに「世を思ひ切らんには、かくこそ心清からめ」「かくこそあらまほしけれ」と評される理想的な出家譚だが、第七段の長明については「社司を望みけるが、かなはざりければ、世を恨みて、出家

して」と紹介した後、次の文言が加えられている。引用文中に「善知識」の語はないが、これも「憂きことにあふも善知識」の事例だろう。

深き恨みの心の闇は、しばしの迷ひなりけれど、この思ひをしも
しるべにて、真の道に入るといふこそ、生死、涅槃とこそ同じく、
煩惱、菩提一つなりけることわり、たがはざりとおぼゆれ。

長明話題は以下、『方丈記』の紹介、庵に持ち込んだ折琴や継琵琶の話が続き、「念仏のひまひまには、糸竹のすさみを思ひ捨てざりけるこそ、教寄のほど、いとやさしけれ。」との感想を加えたのち、後鳥羽院の再出仕の仰せにも従わず「つひに籠り居て、やみにけり。」として結ばれ、その全体が「世をも人も恨みけるほどならば、かくこそあらまほしけれ。」と評されている。(なお、『十訓抄』の成立は長明亡き後のことであるので、『十訓抄』編者は長明没後に行われた『月講式』も念頭に置いた上で記述していると思われる。『月講式』については別稿で取り上げる。)

このようにして、「憂きことにあふも善知識」の善知識観は『宝物集』の影響下になった諸書に散見され、長明についての伝承もこの善知識観のもとで語られていたことが分かる。興味深いのは、この長明伝承が、『宝物集』の影響下にあったというばかりでなく、同時代人の長明像、更に言えば、長明自身の善知識観に端を発していると思われる点である。長明とも交流のあった源家長の『源家長日記』には、長明の突然の出家についての次のような記事がある¹¹。

そのうち出家しおほはらにおこなひすまし侍と聞えしぞ、あまり
けちえんなる心かなとおぼえしかど、さきよにかゝるよすがに

ひかれてまことの道におもむくべき契ふかゝりけるよと、この世の夢思あはせられしならんかし。

この後、家長は思いがけず長明に直面するが、その際の「それかとも見えぬほどにやせをとろへ」た長明の次の言葉が残されている¹²。

「世をうらめしと思ひはべらざらましかば、うきよのやみははる
けず侍なまし。これこそまことの朝恩にてはべるかな」と申て、
苔の袂もよゝとしほれ侍し。

「善知識」の語は見えないが、これも「憂きことにあふも善知識」の例だろう。

こうして、「憂きことにあふも善知識」の善知識観は、『源家長日記』によれば、『発心集』編者である鴨長明自身にも自らの来歴、境遇を通じて深く刻まれた善知識観としてあったことが確かめられる。

2 『発心集』における「憂きことにあふも善知識」観

今井氏は前掲論文の第二章で、『発心集』の「善知識」について次のように述べている。

『発心集』は用例数の多さで、中世説話集の中では『宝物集』に次ぐ存在であろう。特に、臨終に立ち会う善知識の例が多く見られ、『宝物集』「善知識」門の初めの部分との質的な近さが感じられる。更に「恋人との離別」や「貧しきこと」をも「善知識」と説く用例もあり(但し、後者は広本系のみに見える記事)、これらが『宝物集』の「憂きことにあふも善知識」からの影響であ

る可能性はきわめて高いと思われる。

(山田昭全「鴨長明晩年の思想と信仰―宝物集とのかかわりから」
13 では、『宝物集』と『発心集』との深い関係が指摘されている。)

本稿冒頭に掲げた『発心集』の1〜13の話題のうち、「憂きことにあふも善知識」観に関わるのは以下の三話である。

- A … 8 流布本巻五第2話「伊家並びに妾、頓死往生の事」
- B 1… 11 流布本巻七第12話「心戒上人、跡を留めざる事」
- C 1… 12 神宮文庫本巻三第7話「桓舜僧都、貧に依り往生したる事」

本項ではこの三話とともに、Aの関連話題として流布本巻五第1話「唐房法橋、発心の事」及びその同話の異本巻四第14話「唐法坊、発心事」、B 1の関連話題として流布本巻七 第13話「斎所権介成清の子、高野に住む事」(B 2)、C 1の関連話題として流布本巻八第12話「前兵衛尉、遁世往生の事」(C 2)をも取り上げて、鴨長明の「憂きことにあふも善知識」の善知識観について考察する。

A 巻五第2話「伊家並びに妾、頓死往生の事」(8)

本話は流布本にのみある話である。前話、巻五第1話「唐房法橋、発心の事」との間に男女の離別、再会、女の死といった点に共通する要素が認められ、いわゆる二話一対をなす。異本(巻第四第14話)にもある第1話との連纂を図って後に加えられたものであろう。第1話の流布本本文は評論部を持たず、「善知識」の語もないが、異本本文には末尾に「浮世ヲ本トシテ、カ、ル道心ヲ発セル人也。」との人物評が付されている。流布本では第2話連纂の間に削除されたとおぼし

いが、これをもって「憂きことにあふも善知識」事例とみなし、まず第1話を概観しておく。

巻五第1話は、都に恋人を残して下向した蔵人所雑色源国輔が盲目となつた女と再会し、発心出家する話である¹⁴。出家後の逸話が二つ加えられ、その後者には「師の大阿闍梨」慶祚の「まことの道心者なりけり。いとたふとし。」との賛嘆の言葉が紹介されている。

本話の同話は『宝物集』(七巻本)巻第二、六道段の人間第三病苦にあるが¹⁵、女の病死後に朱雀門に捨ておかれた遺体と再会したとするなど、異なる点が多い。話題の扱いも概括評に「病は、うつくしき人をもかくやつし、つよげなる人をもなやます。」とあって、「病苦」話題として、病と死によって容姿が一変した女に焦点を当てたものとなっている。山田昭全氏は前掲論文で、梁瀬一雄氏が本話を「長明の初めての採録話」¹⁶としたのを承けて、『発心集』譚を長明が『宝物集』を主たる手がかりとし独自の調査も加えて記述したものとす。その『発心集』譚は、国輔帰京後の博搜、再会後の懐抱、その折の顔貌変化の発見、女童への事情聴取と、語りは聴取後の感懐「聞くに、心うく哀しき事限りなし」に向けて詳細をきわめ、一話は「まことと道心者」唐房法橋(＝国輔)、あるいは「病苦」の女の話というよりも、男女の仲らい、愛執をこそ詳述するものとなっている。

国輔の発心のきつかけは、離別の間に息絶えて野に捨ておかれ、仮死状態のなかで鳥に眼をくじられ眼窩が「木のふしの抜けたる如く」なつてしまった恋人との再会だった。その折の国輔の感懐は「何の報ひにて、かかるめを(傍点宗近)見るらん、いまは此の世のかぎりにおそありけれ」と語られる。そして「やがてこれより比叡の山にのぼ」って出家する。国輔の出家はこの愛執の女との再会の際の「憂きこと」を機縁、つまり善知識とする。異本末尾「浮世ヲ本トシテ、カ

「ル道心ヲ発セル人也。」の評は、この「憂きことにあふも善知識」を取り立てて評したものだ。付加話題の第一には、出家した国輔を「いみじう智恵かしこき眼、持ちたる人」と評した檀那僧都覚運の言葉が見えるが、女の失われた眼を善知識として「智恵かしこき眼」もつ「まことの道心者」となったのが国輔だったのである。

これに続くのが流布本独自話題、本項に取り上げる巻五第2話「伊家並びに妾、頓死往生の事」である¹⁷。朝夕帝に仕える「なにがしの弁」がかって通った女の家の門前で呼び止められる。邸内の荒廃ぶり、女の「今更心うきたるけしき」なく法華経誦する姿に自らの不実を思うが、女は薬王菩薩本物品中の「於此命終即往安樂世界阿弥陀仏」を二、三度唱え、弁の面前で「やがて寝入るが如くにて、居ながら息絶え」てしまう。話題は「此の男の心、いかばかりなりけむ。」で結ばれるが、これに付された評論部は以下のように語り始められる（第1話に異本にあつた評を欠く流布本では、両話への評論としての意義を担う）。

人を恋ひては、或いは望夫石と名をとどめ、もしくは、つらさの余りに悪霊などになれるためにも聞こゆ。いかにも罪深き習ひのみこそ待るに、それを往生の縁として、思ふやうに終わりけん、いとめでたかりける心なるべし。

あはれ、これをためしにて、此の世にも物思ふ人の往生を願ふ事にて侍らば、いかに心かしこからん。

恋の「つらさ」（＝「憂きこと」）を「往生の縁」とした女（第1話では男）の行状が讃えられ、「物思ふ」（＝「憂きこと」）を善知識とすることが称揚される（この「物思ふ人」は長明自身のことでもあ

ろう）。そして、以下、恋の「罪深き習ひ」を楊貴妃、李夫人の故事、恋歌の修辭によつて示した後、評論は次のように締めくくられている。

此の如く、世々生々、互ひにきはまりなくして生死のきづなとならん事の、いと罪深く侍るなり。此の度、思ひ切りて、極楽に生まれなば、うきもつらきも寝ぬる夜の夢にことならじ。立帰り善知識とさとりて、かれをみちびかん事こそあらまほしく侍れ。もし、浄土にてなほ尽きがたき程のうらみならば、其の時云ひむかへをもせよかし。

前話と二話一対をなす中で、「善知識」の語がここで初めて用いられる。「罪深」き男女の仲らひの間の「うきもつらきも」を善知識とするばかりでなく、往生後に配偶者を導くこと（『一言芳談』巻下という「還来穢国（度人天）」¹⁸）が「あらまほし」き事であるとされる。最後の一文中の「うらみ」は、本文中の「聞こゆべき事侍り」「もの云はんと思へるけしき」など、第2話の女がこの世に思いを残していることを受け止めたものだが、第1話の盲目の女の悲しみとも響き合い、「まことの道心者」（国輔＝唐房法橋）による女の救済（「立帰り善知識とさとりて、かれをみちびかん事」）を想うものようでもある。

本話の同話は『今鏡』打開第一〇、『今昔物語集』巻第三一「右少弁師家朝臣、値女死語第七」にあるが、女が死んでからの後日譚にそれぞれ異なりが認められる。

○『今鏡』打開第一〇「敷島の打開」¹⁹

（女の絶命の後、男）かくて籠りもし、又頭剃おろしてむと思ひけれ

ども、当時弁なりける人なれば、さすがえ籠らで、土に降りて、とかくの事泣く泣く沙汰して、しばしは山里に隠れ居りければ、世を背きぬるなど聞こえけれど、さすが隠れも果てで、出で仕へければ、かへるの弁とぞいひける。

○『今昔物語集』巻第三「右少弁師家朝臣、値女死語第七」²⁰

然テ、其レヨリ返テ、弁幾モ無クテ病付テ、日来ヲ経テ遂ニ失ニケリ。其ノ女、寄タルニヤトゾ。其二、親カリケル人ハ、女ノ靈ナドハ知タリケムカシ。

其ノ女、最後ニ法花経ヲ読ミ奉テ失ニケレバ、定メテ後世モ貴カラムト、人モ見ケルニ、弁ヲ見テ深ク恨ノ心ヲ発シテ失ケルニコソハ、何ニ共ニ罪深カ、ラムトゾ思ユル。

此ナム語り伝ヘタルトヤ。

『今鏡』譚には女の往生についての言及がない。男もその後出家したように思われたが、結局俗界に戻って出仕し、「かへるの弁」との渾名を得たという。『今昔物語集』話では、女の往生は否定され、男はこの世に恨みを残した女の霊の仕業かと疑われるかたちで病死している。²¹ 女と再会した時の男の言動には、「経読奉ルヲモ取り妨ゲテ臥ナバヤ」と愛欲が前面に出ており、葉王菩薩本品の一節を涙ながらに誦す女への発語も「穴あなうた、尼原ノ様ニ道心付給タルヤ」と否定的だ。そして女の死の直前の発語は「今一度対面セムト思テ呼聞エツル也。今ハ此レヲ恨ミテ」。結果、男女はともに救われず、むしろ兩人の「罪深」さが強調されているのが『今昔』話である。

他方、『発心集』譚では、評論部で、見たように「人を恋ひては、(中略) つらさの余りに(中略)、いかにも罪深き習ひのみこそ待るに、それを往生の縁として、思ふやうに終わりけん、いとめでたかり

ける心なるべし。」と、愛執の「習ひ」、「つらさ」を善知識として自らを救う女を讃え、さらに、「立帰り善知識とさとりて、かれをみちびかん事こそあらまほしく侍れ。」と、往生を遂げた女が「つらさ」(「愛執」「憂きこと」)を善知識とみなしてその因たる男を救うことに期待を寄せている。女の往生、男の救済には触れることなく「かへるの弁」の異名由来譚として語り終える『今鏡』あるいは、「恨ノ心」によつてともに救われることのなかつた男女を語る『今昔』と比べる時、『発心集』の長明はそれらとは異なり、女の往生を確信し、その「往生の縁」にこそ関心を向けていることが分かる。ここでの「往生の縁」とは愛執。長明はそこに善知識ともなりえた愛執を認め、それが男の救済へと進むことを願う。愛執に発する「うきもつらきも」が「往生の縁」、救済の因となるとはまさしく「憂きことにあふも善知識」だが、こうした『今鏡』『今昔物語集』とは異なる『発心集』の話題の扱い方は、第1話とともに、長明自身のこの善知識観への関心の強さ、更にいえば、この善知識観の確証を求めて取材し、連纂を図り、いつそうそこに引き寄せられていく長明の在り様をよく伝える。

B1 巻七第12話「心戒上人、跡を留めざる事」(11)

本話は流布本巻七最終話の直前に位置し、『発心集』中で最も長大な評論部を有する章段である。²² 「心戒」は平宗盛養子の平宗親(従五位下阿波守)の法名。『一言芳談』巻下に「心戒上人、つねに蹲踞し玉ふ。或人其故を問ければ、三界六道には、心やすくしりさしすへて、ゐるべき所なきゆへ也、云々。」²³ とあり、それを承けて『徒然草』第49段に「心戒といひける聖は、あまりにこの世のかりそめなることを思ひて、静かについひけることだになく、常はうづくまりてのみぞありける。」²⁴ と、その行が伝えられる人物である。一方、源平

の争乱の折、平維盛とともに屋島を脱出して高野山に入り、新別所に住した後に逐電したともいい²⁵、『一言芳談』巻下には「四國修行のあひだ」の行状が記されている²⁶。本話は前者「蹲踞」ではなく後者の逐電、廻国する心戒の逸事を語ったものである。

一話は「近く、心戒坊とて、居所も定まらず雲風に跡をまかせたる聖あり。」で始まり、以下、「平家ほろびて、世の中目の前に跡かたなく、あだなりしに」発心↓高野籠居↓入宋↓帰国↓廻国↓天王寺(妹八条院住坊)↓山崎に庵住↓穴生↓逐電↓「後、更にその行末もしらずなむ侍りし」と、その足跡を辿る語りをもつてなる。この間の行状は、

○もとより世をそむける仏性坊と云ふ聖に逢ひともなひて、高野に籠り居て、年久しく行はれけり。

○彼の国(宋)に年比ありて、行ひける有様も世の常の事にあらず。偏に身命を惜しまず。

○此の国に還りて、都辺は事にふれて住みにくしとて、常には、えびすか・あくろ・津軽・壺碑など云ふ方にのみ生まれけるとかや。

○(天王寺理円坊(妹)訪問時)童部あまた、後にたてて、「物くるひ」と笑ひのしる。其の様を見れば、人にもあらず、瘦せくろみたる法師、紙ぎぬの汚げにはらはらと破れたる上に、麻の衣のここかしこ結び集めたるを僅かに肩にかけつつ、片かた破れ失せたる檜笠を着たり。

○(山崎での庵住時の発語)「かくてもなほ、後世は必ず修すべしとも覚えず。事にふれて障りあり。ただ、もとありしやうに、いづくともなくまどひありき、聊かも心けがさじと思ふ。」

として語られるが、それは、たとえば『一言芳談』巻上にいう²⁷、

「後世者はいつも旅にいでたる思ひに住するなり。雲のはて、海のはてに行とも、此身あらんかぎり、かたのごとくの衣食住所なくてはかなふべかざれども、執すると執せざるとの事のほかにかはりたるなり。つねに一夜のやどりにして、始終のすみかにはあらずと存ずるには、さはりなく念佛の申さるゝ也」

「いたづらに、野外にすつる身を、出離のためにすてゝ、寒熱にも病患にもをかさるゝは、有がたき一期のおもひ出かなと、よろこぶ様なる人のありがたきなり」

を体现する生き方であつて、長明もそれを讀んで話題の末尾を、「いと尊く、今の世にもかかるためしも侍れば、これを聞きて、我が心のおろかなる事をも励まし、及びがたくとも、こひねがふべきなり。」と結んでいる。

本話をほぼ同じ結構をもつて語る『延慶本平家物語』(第六末・三
四・阿波守宗親発道心事)²⁸は、

後ハ、居所モ定メズ、雲風ニ跡ヲ任テ、更ニ行ヘモシラズ。イト
貴ク、末世ニハ有難キ程ノ、无極ノ道心者也。此人計ゾ迷アリキ
テ、平家ノ後世共被訪ケル。

と結び、平家縁者の菩提追悼供養譚として語り収める。「イト貴ク、末世ニハ有難キ程ノ、无極ノ道心者也。」は『発心集』の話題理解を引き継いだものだろう。

逐電、廻国の陰徳行は、『発心集』巻一、開巻第1話「玄敏僧都進世逐電の事」・第3話「平等供奉山を離れて異州に赴く事」にも語られる。それはかかる境涯への憧憬を持ち続けて生きる長明の姿をうかがわせるが、ここで、「昔」で始まる玄敏僧都（弘仁九年（八一八）没）譚に対して、「今の世」の「ためし」として心戒上人を取り上げているところには、末世の現在に規模を求めて自らを励まそうとした長明の心意が働いていると見てよいだろう。

さて、こうして長明の心を強く捉えた心戒上人発道心、廻国陰徳譚についての話末評論は、次の「或る人」の所感をめぐって展開する。「善知識」の語はその中に現れる。

ここに、或る人の云はく、「かくの如くの行、我等が分にあらず。一つには、身よわくして、病ひおこりぬべし。一つには、衣食ともしからば、なかなか心乱れてむ。身を全くし、心をしづめて、のどかに念仏せんにはしかじ」と云ふ。

この「或る人」の所感について、新潮日本古典集成『方丈記・発心集』は頭注に次のような見解を示している。²⁹

長明の著書『無名抄』にも「或る人の云はく」で始まる文章が目立つ。多く長明自身の思惟を「或る人」に仮託して語ったものと思われる。この段落もその一つか。『徒然草』などにも類例が多い。

従うべきであろうが、発道心廻国行にともなう身病、衣食問題は先に引いた『一言芳談』巻下にも「雲のはて、海のはてに行とも、此身あ

らんかざりは、かたのごとくの衣食住所なくてはかなふべかざれども」「いたづらに、野外にすつる身を、出離のためにすてゝ、寒熱にも病患にもをかざるゝ」として見える。したがって長明の「思惟」ではなく、そうした通行の論題をひきとって自ら議論を展開しようとしたものとすべきだろう。その議論は「或る人」の「身を全くし、心をしづめて、のどかに念仏せんにはしかじ」の命題への次のような反論をもつて始まる。

これ、ひとへに志浅く、道心少なき故なり。実心おこらずは、仏法合ひがたし。露命消えやすし。一念にて、他事を思ふべからず。片時なりとも恐れたらん事、毒蛇の如くに捨て、此の身をば、水のみなもとといふべし。かかれば、わざとも此の身を仏道の為に投げて、不退の身を得んとこそ覚ゆべけれ。病ひおこりて死なんに至りては、思ひあるべき身かは。悪業の依身なり。不浄の庫蔵なり。つひに道の辺の土となるべし。しばしいたはりて何かせん。

発道心廻国行にともなう身病、衣食問題が「心」「志」「道心」「実心」と「身」（「露命」「水のみなもと」「悪業の依身」「不浄の庫蔵」「つひに道の辺の土」の軽重問題として論じられているのが分かる。以下、「或る人」の懸念（「一つには、身よわくして、病ひおこりぬべし。一つには、衣食ともしからば、なかなか心乱れてむ。」）に即した説論が続くが（「いかに、衣食は生得の法なり。天運にまかせてもあり。病ひは又、習に従ふ。いたはるとても、必ずしも去らず。」）、やがて「心」「身」問題に回帰して発心捨身命が勧められ（「もし、心を深く発して、此の度決定往生を遂げんと思ふ人は、早く名利をい

とひ、身命を捨ててねんごろにつとめ、常に願ふべし。」、さらに「身」（病、衣食問題）への執が諫められていく。

もし、世執なほ尽きずは、静かに此の身のありさまを思ひ解くべし。大方、此の身は有るにもあらず、又、久しく留むべき物にもあらず。すずろに化生する物にもあらず。ただ、流来生死の夢の内、因縁おのづから和合して、仮に業報の形の頭はれたるばかりなり。云はば、旅人の一夜の宿を借るがごとし。これに何の会著かあるべき。

「旅人の一夜の宿」は「六十の露消えがた」に結んだ庵の喩として『方丈記』に見えるが（典拠は『池亭記』³⁰、先の『一言芳談』にも「身は」つねに一夜のやどりにして、始終のすみかにはあらずと存ずるには」とあつた。長明はこうした流通する言説に即して厭離すべき「身」（「何の会著かあるべき」）を強調するのである。

しかし、議論はここで屈折して当初の論題から逸れていく。「善知識」の語が現れるのは、その新たな議論においてのことである。

此の身は、かくあだなる物なれど、しかも、我が心かしこく愚かなるに従ひて、仇敵ともなり、又、善知識ともなるべし。

以下、「身」の「仇敵ともな」る所以が示され、例話に『私聚百因縁集』巻第二等にも所見の『天尊説阿育王譬喻經』目連説話（前身の骸を打つ餓鬼との遭遇譚）餓鬼曰く「我が世に侍りし時、此の骸を得し故に、物を食じ、物を惜しみて多くの罪を造りて、今は餓鬼の身を受けたり。」が引かれるが、これに今一つの目連説話（前身を供養す

る天人との遭遇譚）天人曰く「此の身に功德を造りしによりて、今天上に生れて、諸々の樂を受くれば」が加えられて、評論の文脈は「善知識ともなる」「身」へと切り替わっていく。評論の末段は以下の通りである。

かかれば、ひたすら身のうらめしかるべきにもあらず。善悪にも従ひて、大きな知識となるべきなり。彼の都率の覚超僧都は、月輪觀を修して証を得たる人なり。其の觀文の奥には、「縦ひ、紫金の妙体を得たりとも、かへつて黄壤の旧骨を拝せん」とぞ書かれて侍りけり。実に、道心あらん人の為には、此の身ばかり尊くうれしかるべき物なし。これらの理を思ひ解きて、身命を仏道の為に惜しまずは、ことさらに事理・懺悔を修せずとも、六度の難行を経、尽さずと云ふとも、波羅蜜の功德も、おのづからそなはりぬべし。

「善悪にも従ひて、大きな知識となるべきなり」は先に引いた「我が心かしこく愚かなるに従ひて、仇敵ともなり、又、善知識ともなるべし」の再説。「実に、道心あらん人の為には、此の身ばかり尊くうれしかるべき物なし」は「身命」をめぐる議論の結論である。こうして、詳説説論された「仇敵」たる「身」は「尊くうれしかる物」（＝善知識）と捉え返される。そして、心戒上人もまた、発道心、廻国陰徳の「末世ニハ有難キ程ノ、無極ノ道心者」というばかりではなく、「或る人」の所感への反論を通じて、「心かしこく」「身命を仏道の為に惜しまず」（＝「善」）、「仇敵」たる「身」（＝「憂きこと」）を善知識とした「道心あらん人」として捉え返される。この捉え返しには『方丈記』にも明らかな、長明自身の抱える「身命」をめぐる「執」

への警戒が深く関わっている。自らと同じ警戒をもって「仇敵」たる「身命」を「心かしこく」善知識に転じた「今の世」の道心者、心戒上人の発見。話題末尾に加えられた「いと尊く、今の世にもかかるためしも侍れば、これを聞きて、我が心のおろかなる事をも励まし、及びがたくとも、こひねがふべきなり。」は、そうした発見とともに発せられた賛嘆の声とも見なされる。

B2 流布本巻七第13話「齋所権介成清の子、高野に住む事」(B1

関連話題)

本話はB1に続く流布本巻七の最終話で、源平争乱後の東大寺大仏開眼供養への参詣の機に発心、故郷尾張中嶋郡を出走して「大仏の上人」俊乗房重源の元で出家、後、師の勧めで高野新別所に上って「二十四蓮社友」となり、難行七、八年、「臨終思ひのごとく、念仏の声絶えずして、居ながら終」った聖(齋所の権介成清)の子。同話『三國伝記』巻四第30話によれば、俗名清道、法名「寂阿弥」、聖名「齋所聖」。建久六年(一一九五)没)の話題である³¹。その往生時、長明は四一歳。末尾には「今の世の事なれば、彼の別所にしらぬ人なし。」とある。これも前話同様、寿永・元暦の争乱後の、「今の世」の事績である。

本話と前話との関係は、そればかりでなく、話中、重源に発心の所以を問われて「成清」子が語る言葉に「世の無常を思ふに、何事もよしなしと思ひ侍れば、ただ身命を仏道に投げて、仏の悲願をたのみたてまつらばかりこそ賢からめと、一心なく思ひ立ちて侍る」とあり、勤行の姿が「食物・着る物は、あるに随ふ。さらに身命を惜しむ事なし。」と語られ、末段、難行ぶりに「何の故にか、身命をいたはらざらん」と問う「或る人」に「世は末世なり。身は凡夫なり。今たまた

ま心をおこせり。此の心さめざらん先に往生を遂げんと思ふ。此の故に身命を惜しまず。」と応じた一件が加えられているところにも明らかである。本話は、前話評論末尾の「これらの理を思ひ解きて、身命を仏道の為に惜しまずは、ことさらに事理・懺悔を修せずとも、六度の難行を経、尽さずと云ふとも、波羅蜜の功德も、おのづからそなりぬべし。」の例話の意義を担って採録されたのである。したがって、評論部を欠く本話に「善知識」の語はないが、前話との連続のなかでは、この聖も「心かしこく」「身命を仏道の為に惜しまず」「仇敵」たる「身」(「憂きこと」)を善知識とした「道心あらん人」である。

この善知識観は、『日本往生極楽記』序の次の記事と比較すればその位相が理解しやすいのかもしれない³²。

また瑞応伝に載するところの四十余人、この中に牛を屠り鶏を販ぐ者あり。善知識に逢ひて十念に往生せり。予この輩を見るごとに、いよいよその志を固くせり。

本話の聖も、在俗中は「狩・すなどを事として、さらに因果の理をも知らず」とある。そして、親に伴われての東大寺大仏供養参詣を縁に発心し、重源の元で出家、後、師の勧めで入った高野での難行を経て往生を遂げる。『日本往生極楽記』の踏まえる善知識観にしたがえば、大仏、もしくは重源こそが善知識であるはずだが、長明はそれには触れず、「ただ身命を仏道に投げて、仏の悲願をたのむ聖の行を繰り返し語り、それを通じて「仇敵」たる「身」(「憂きこと」)をこそ「善知識」として往生する聖像を象っていく。ここにも自らの抱える「身命」をめぐる「執」への警戒のなかで話題と向き合う長明

の姿がうかがえるが、こうして長明は、教説通行の善知識観を越えてこれを拡張し、自らを支え励ます「憂きことにあふも善知識」観にとられて、その確証を「今の世」の事跡に求めていくのである。

これに関わって、話中、重源が語る発心賛嘆の言葉も「憂きことにあふも善知識」の善知識観の位相を考える材料を提供するものとなっている。

いといとありがたき事なり。此れ等に、弟子と名付けたる聖、その数侍れど、すずろに世を捨てたる人はなし。或いは主君のかしこまりを蒙り、或いは世のすぎがたき事を愁へ、或いはかなしき妻におくれ、或いは司位に付けて世をうらみなど、様々心にかなはぬを、其れを次としてのみこそ世を捨つる習ひにて侍れば、其の事忘れなん後は道心もいかがと危ふく侍るを、聞くがごとくならば、発心にこそ、仏も必ずあはれとかなしみ給ふらめ。いとありがたき事なり。

重源弟子たちは、傍線部の通り、「すずろ」ならぬ「様々心にかなはぬ」事情をもって出家したという。それらは善知識ともすべき「憂きこと」の数々である。しかしここではそれが「次」と評され、「善知識」とは認められていない。「其の事忘れなん後は道心もいかがと危ふく侍る」。これは「憂きこと」を善知識となしえない場合を念頭においての発言だが、『十訓抄』第九第五段の先の引用にあった「身はさすがに捨てはてられぬものなれば、恨みは末も通らず、後悔しきりにもよほして、あるいは、いまさら世に出て、はしり仕へ、あるいは、高野、粉河のかくれよりも、いつしか帰り来ぬこそ、人笑はれに、いふにかひなけれ。」がその具体だろう。対して本話の「成清」子は

「高野のかくれ」に留まって往生を遂げる。すなわち、「憂きこと」をもって「世を捨つる」のが「習ひ」だが、それが真に「憂きことにあふも善知識」であるためには、「身」を「捨てはて」、「道心」を堅固に持して「その事」（「心にかなはぬ」こと）「憂きこと」を「忘」れず「往生の縁」とするということなのである。

本話は重源の弟子たちとは違って「親ゆたかなれば、心に叶はぬ事もな」き「成清」子が「世の無常」を思い、「心に叶はぬ事」ならぬ「身命」をこそ「憂きこと」とする境位を語る。そこには、『宝物集』の「憂きことにあふも善知識」観を越えて、善知識としての「憂きこと」を採録話題の再話を通してより深く捉え、この善知識観をより厳しいものとして体験していく長明の姿もうかがえそうである。

C1 神宮文庫本巻三第7話「桓舜僧都、貧に依り往生したる事」(12)

本話は異本のみにある話題だが、流布本巻八第12話「前兵衛尉、遁世往生の事」(C2)の評論部に「これも、かの桓舜僧都の類にこそ。」とあるところから、流布本の原態にあった話題で、後に神明に関わる話が多くなったために削除されたか、と貴志正造によって指摘されている³³。なお、標題にある「桓舜僧都」の称は話中になく、「月蔵房ノ僧都ト云、是也。」の記事が話題部分末尾に見える。

本話は「世路叶又事ヲ愁テ」日吉山王権現に詣でる「貧シキ法師」の話である³⁴。世路を祈る数年の山王参詣に効験のなかった法師は、知人に伴ない稻荷（伏見稻荷大社）に参籠する。話題の軸を成すのはその七日目の夜の夢。稻荷神（「唐装束シタル女房」）から「千石」の札を賜わって喜び帰参の途次、現れた客人がそれを妨げ稻荷神に札を取り戻させる。法師はその客人が山王であり、年来の折りの甲斐のなかったのはその妨げのせいであったと恨めしく思うが、夢の終わり

に山王が稲荷神に妨げの理由を次のように語るのを聞く。

「此ノ僧、順次ニ必生死ヲ離ルベキ者ニテ侍ルヲ、若シ豊カニテ世ニ侍ラバ、必余執深ク成テ、猶穢土ニ留ルベキ也。是ニ依リテ、自ラヨキ様ナル事ヲバ、我ガ兎角違ヘテ、往生ヲ遂ゲサセント構ヘ侍ル也」

法師はその後山に帰り、専ら後世を祈り往生した。評論部には次のようにあり、そこに「善知識」の語が見える。

カ、ル時ハ、トニカクニ、仏神ノ御構ヘホドニ有リガタク目出度事ハ無カリケリ。又、貧シキモ善知識也。愚カニシテ、三宝ヲソシリ給フベカラズ。

「貧シキモ善知識也」とは、『宝物集』（七巻本）巻第七の十二門第十善知識門にあった「あるひはまづしく、あるひは世をうらみ、或はうき事にあふ、みな善知識の因縁なり」と符合する。本話は「仏神ノ御構へ」を主題とする話題である（『私聚百因縁集』巻第九第24話の同話の標題には「付神明大悲」とある³⁵）。それを、「また」として「貧シキモ善知識也」、すなわち「憂きことにあふも善知識」観によって新たに意味づけているわけだが、この再解釈のうちに、かかる善知識観に強く捉えられていた長明の姿を見出すことができる。

C2 流布本巻八第12話「前兵衛尉、遁世往生の事」(C1 関連話題)

本話は前兵衛尉、すなわち宮中護衛の武官の三等官（従七位上から正七位下）を勤めた男の話である³⁶。検非違使大夫少輔（五位）の

弟に比べて「数ならぬことの心憂く」思われた兵衛は、年来帰依する賀茂社に詣でて昇進を祈り、籠居した夜に本地阿弥陀如来來臨の夢を見る。これを「御計ひ」と考えて出家したところ、かつて望んだ「現世」の榮達が「夢幻のさかえ」と観じられ、この観想の獲得こそが「まことにすぐれたる神徳」だったと気付く。そして夢中に現れた阿弥陀如来の姿を心に懸けて念仏三昧の日々を送り、臨終正念、念仏高声の内に終わりを遂げる。評論部に「善知識」の語はないが、一話は次のように評されている。

まことに、浮雲のとともかくてもありぬべし。これもかの桓舜僧都の類にこそ。世の思ふやうならぬより、得脱すべき縁のありけるにこそ。

「かの桓舜僧都の類にこそ」とは、本話題の主題をC1の話題と同様、「仏神ノ御構へ」「神明大悲」「神徳」に認めてのことだろうが、これに続く「世の思ふやうならぬより、得脱すべき縁のありけるにこそ」は、これもC1評論部の「貧シキモ善知識也」を本話題にあわせて言い換えたものであろう。こうしてこの評論部は、「桓舜僧都」（『月蔵房ノ僧都』）の名が神明譚の主人公というばかりでなく「憂きことにあふも善知識」の証跡として長明の心に深く刻まれ、折々に賦活されるものとしてあったことを教える。

長明は（下鴨神社撰社河合社）社司を望みけるが、かなはざりければ、世を恨みて、出家したのだった（『十訓抄』第九第七段）³⁷。「数ならぬことの心憂く覚え」て「賀茂」に詣でる本話の前兵衛尉は、長明の眼には自らに重なる人物と映ったであろう。その前兵衛尉の逸事を桓舜僧都に重ねて「世の思ふやうならぬより、得脱すべき縁のあ

りけるにこそ。」と評する長明に、自身の願いをも響かせる思いがなかったのかどうか。いずれにしても、『宝物集』にいう「あるひはまづしく、あるひは世をうらみ、或はうき事にあふ、みな善知識の因縁なり」の善知識観が、長明の主体に深く関わる言説として、『発心集』最終巻にいたるまで濃い影を落とし続けていたことは確かなことであるろう。

*

『発心集』の成立過程について、浅見和彦・伊東玉美訳注『新版発心集下』に次の解説がある³⁸。

現在、流布本の巻一〜六に相当する内容が、もともとの『発心集』の基幹部分(原『発心集』と仮称)であり、巻七・八は増補などではないかとする推定が、一定の説得力を持つて存在している。大まかに言えば、流布本巻六までの内容に近い状態の原『発心集』から異本が作られ、また原『発心集』に巻七・八が増補されて、現在の流布本が形作られたのではないかとする見方が優勢なように思われる。

このように、仮に流布本巻六までを一まとまりと見て、巻七・八は増補と想定した場合の「増補者」の候補として、鴨長明自身の可能性を排除せずに考えてみるのが重要であろう。序で宣言した、専ら仏道に関する「賢き」「愚かなる」例を集めた座右の書を編纂しようとした当初の編集目的を、巻六までで一旦満たした長明が、巻七・八を自身で書き継いだ可能性を視野に入れ、長明の思想の変遷を考慮することも大切であろうと思うのである。

これにしたがえば、本稿で考察した「憂きことにあふも善知識」の善知識観にかかわる諸段は、

○原『発心集』(流布本巻一〜六)

A 1 巻五第2話【異本ナシ】

十巻五第1話【異本巻四第14話】

C 1 神宮文庫本巻三第7話【流布本ナシ】

○増補部分(流布本巻七〜八)

B 1 巻七第12話【異本ナシ】

B 2 巻七第13話【異本ナシ】

C 2 巻八第12話【異本ナシ】

として整理されることになる。これによれば、原『発心集』に採録されていたと見られる話題(ただし、A 1は増補か)の「憂きこと」が男女愛執(A 1及び前話第1話)、貧(C 1)であり、増補部分のそれが「身命」(B 1・B 2)、「現世」栄達をめぐる「世の思ふやうならぬ」こと(C 2)となり、原『発心集』の事例が『宝物集』にいう「あるひはまづしく、あるひは世をうらみ、或いはうき事にあふ」と符合していることが分かる。増補部分の「身命」「世の思ふやうならぬ」ことはこれを拡張したものとも見られ、そこに「長明の思想の変遷」を認めてよいのかもしれない。

また、見たように、長明は『宝物集』の「憂きことにあふも善知識」の善知識観の影響下にありながらも、それを自らの来歴、境遇に重ねて主体化し、話題人物の行状、言動を辿り語り直し、捉え返しながらこの善知識観を深め、それを通じて『宝物集』を越えた「思想の変遷」を歩んだようでもある。長明の「憂きことにあふも善知識」観は「数寄」への執をもそこに抱えてさらに拡張されていく。それを含めた長明善知識観の全貌の考察は次稿を期することとしたい。

注

- 1 中村元監修『広説仏教語大辞典 縮刷版』（東京書籍、平成二二年）。
 - 2 浦田成美「延慶本『平家物語』における建礼門院の往生をめぐる」（『清
泉語文』第三号、平成二四年三月）。
 - 3 『発心集』（流布本）の引用は新潮日本古典集成『方丈記・発心集』（新潮
社、昭和五一年）に拠った。また異本（神宮文庫本）の引用は『鴨長明全
集』（貴重本刊行会、平成二二年）に拠った。以下、同。
 - 4 今井ちとせ「『宝物集』「善知識」の門をめぐる——「憂きことにあふも善
知識」を中心に——」（『宝物集研究』二号、平成一〇年三月）。
 - 5 『宝物集』の引用は新日本古典文学大系本（岩波書店、平成五年）による。
三二〇頁。以下同。
 - 6 注2、同。以下の『延慶本平家物語』の引用は『延慶本平家物語全注釈
第六末』（汲古書院、平成三一年）による。四四三頁・四四四頁・五六四頁
引用に際して濁点等の校訂を施した。
 - 7 『十訓抄』の引用は新編日本古典文学全集本（小学館、平成九年）に拠る。
三七四〜三七五頁。以下同。
 - 8 注5同。三二〇〜三二二頁。
 - 9 注7同。三七八頁。
 - 10 注7同。以下、第九第七段記事は三八〇〜三八二頁。
 - 11 『源家長日記』の引用は『源家長日記一校本・研究・総索引』（風間書房、
昭和六〇年）に拠る。八五頁。引用に際して濁点等の校訂を施した。なお、
先に記した「みなし子」記事は八〇頁。
 - 12 注11同。八七頁。
 - 13 （ ）内の記事は今井論文中の注に拠る。
- 14 以下の本文引用は注3同。一九九〜二〇四頁。
 - 15 以下の本文引用は注5同。八一〜八二頁。
 - 16 梁瀬一雄「はじめての採録話」（『発心集研究』昭和五十年五月）。
 - 17 以下の本文引用は注3同。二〇四〜二〇七頁。なお、本文中に「名は忘れ
にけり」とあるので「伊家」の名を記す標題は後人によるものである。
 - 18 『一言芳談』の引用は日本古典文学大系『仮名法語集』（岩波書店、昭和
三九年）に拠る。二二三頁。以下同。
 - 19 『今鏡』の引用は海野泰男『今鏡全釈 下』（福武書店、昭和五八年）に
よる。四五六〜四五七頁。
 - 20 『今昔物語集』の引用は新日本古典文学大系『今昔物語集五』（岩波書店、
平成八年）による。四五四頁。
 - 21 ちなみに、『発心集』譚に男の死は語られないが、標題は「伊家並びに、妾、
頓死往生の事」とある。「伊家」の名を与えた後人の『今昔』系伝承との接
触を考えてもよいかもしれない。
 - 22 以下の本文引用は注3同。三二三〜三三三頁。
 - 23 『一言芳談』の引用は注18同。一九九頁。
 - 24 『徒然草』の引用は角川ソフィア文庫『新版 徒然草』（KADOKAWA、
平成二七年）による。
 - 25 注3、当該話頭注一三。三二三頁。
 - 26 『一言芳談』の引用は注18同。二〇九頁。
 - 27 『一言芳談』の引用は注18同。一九五頁。
 - 28 『延慶本平家物語』の引用は注6同。六三〇〜六三一頁。
 - 29 注3同。三二七頁頭注、*印。
 - 30 『方丈記』の引用は注3同。三〇頁。また、同頁頭注二、参照。
 - 31 以下の本文引用は注3同。三三四〜三三三頁。「成清の子」については、
同書三三四頁頭注三、三四三頁頭注五、参照。

- 32 『日本往生極楽記』の引用は日本思想大系『往生伝・法華験記』（岩波書店、昭和四九年）の書き下し文に拠る。一一頁。
- 33 貴志正造『発心集』総説（鑑賞日本古典文学『中世説話集』、昭和五二年）一三四～一三五頁。
- 34 以下の本文引用は注3同。二九一～二九二頁。
- 35 『私聚百因縁集』の引用は『私聚百因縁集 下』（古典文庫、昭和四四年）に拠る。一四九頁。
- 36 以下の本文引用は注3同。三七六～三七八頁。
- 37 引用は注7同。三八〇頁。
- 38 角川ソフィア文庫『新版発心集 下』（KADOKAWA、平成二六年）、三四一～三四二頁。三四九～三五〇頁。

（平成三〇年度～令和元年度研究生）